議事要旨

会議名	令和７年度第２回板橋区環境教育推進協議会
開催日時	令和７年１２月４日（木）　１４時００分～１６時００分
開催場所	第一委員会室
出席者	【委員　１９名】（敬称略） 小澤委員、幸田委員、藤森委員、岩本委員、小日向委員、森本委員、石川委員、齋藤委員、奥積委員、寒川委員、枇杷阪委員、阿部委員、矢作委員、小柳委員、木村委員、岡部委員、小澤委員、雨谷委員、林委員 【事務局　９名】 環境政策課長、資源循環推進課長、環境教育係４名、指導室統括指導主事、指導主事１名、エコポリスセンター館長
会議の公開（傍聴）	公開（傍聴できる）
傍聴者数	１人
次第	１　委員の委嘱 ２　部長挨拶 ３　座長、副座長の選出 ４　議事 （１）板橋区環境教育推進プランの進捗状況の報告 （２）（仮称）板橋区環境基本計画２０３５（素案）の報告 （３）「環境教育実践研究部会」の活動報告について （４）その他 ５　閉会
配付資料	資料１　　板橋区環境教育推進協議会委員名簿 資料２　　板橋区環境教育推進協議会設置要綱 資料３　　板橋区環境教育推進プランの進捗状況の報告 資料４　　【概要版】板橋区環境基本計画２０３５（素案） 資料５　　板橋区環境教育推進協議会の専門部会の位置づけについて 資料６　　令和７年度板橋区環境教育実践研究部会　活動内容及び進捗状況 資料７　　環境教育実践報告書 資料８　　その他（区内の緑のカーテンに関する取組み） 参考資料１　「第２４回 環境なんでも見本市」実施結果について 参考資料２　令和７年度板橋区エコみらい塾　塾生募集チラシ 参考資料３　板橋区環境基本計画２０３５（素案） 参考資料４　板橋区環境基本計画２０３５策定スケジュール
所管課	資源環境部環境政策課環境教育係 （電話：３５７９-２２３３）

審議状況	１　委員の委嘱 　委嘱状の交付が行われた。
	２　部長挨拶 　資源環境部長による挨拶が行われた。
	３　座長、副座長の選出 　座長として小澤委員が選任された。 　副座長として、幸田委員、藤森委員、岩本委員が選任された。
	４　議事 （１）板橋区環境教育推進プランの進捗状況の報告について 　事務局より資料３、参考資料１、参考資料２について説明が行われた。 －質疑応答－ 〇小柳委員 　①資料３の１ページ目「施策６　行動変容」において、環境講座等の受講者の８割以上が環境配慮行動を実践していることは驚異的な数字である。しかし、これを「一定の効果」と表記するのは過小評価であり、「大きな効果」等、よりポジティブな評価記載にすべきではないか。 　②資料３の２ページ目の表２の※１において、「停滞」が「０％以下」と定義されているが、本表では「０％未満」と記載されている。議論の本質に関わる致命的な齟齬ではないが、正確性を期する観点から定義を統一する方がよいのではないか。 〇事務局 　①行動変容の実績は区としても評価している。他の項目との整合性を図りつつ、どのような表現が適切であるか検討していく。 　②表現の統一について、検討していく。 〇小澤座長 　学びは学校だけに限られるものではなく、地域の特性を活かした形で広がってほしいと考えている。特に、エコポリスセンターが実施するエコみらい塾を活用すれば、参加者同士の交流の機会を増やすことができると期待している。 　近年、気候変動が顕著になり、日常生活に不安や戸惑いを抱える市民も増えている。武蔵野市では、こうした「もやもや」した感情を語り合う場として「もやもやカフェ」を開催し、住民の心の場を提供している。板橋区にもエコポリスセンターという魅力的な拠点がある。区民が自然と集まれる機会を創出し、交流と学びの場を充実させてほしい。 〇阿部委員 　資料３の「２　全体の総括」について、環境団体の数が減少していることは事実である。私はエコポリスセンターを拠点に１５年間活動してきたが、他の団体も同様に高齢化の影響で数が減少している。 　そこで、エコポリスセンター館長と協議し、大学生に夏季休暇中に環境団体の活動現場を見学させ、次世代へのつながりを構築しようと考えた。大学の事務局を通じて大学生への見学打診を行ったが、残念ながら反応は得られなかった。

	今後は高齢化が進む中で、ノウハウを次世代に継承しつつ、地域の環境問題に共に取り組んでいく必要がある。エコポリスセンターを中心に環境団体と連携し、環境活動を推進していきたいが、次世代とのつながりが構築できていないのが課題である。 〇小澤座長 板橋区には大学が多数所在していることから、大学へ呼びかけるとともに、中高生の参加も促し、板橋区環境教育推進プランを考える場を設けられるとよい。 （２）（仮称）板橋区環境基本計画２０３５（素案）の報告について 事務局より資料４について説明が行われた。 〇木村委員 ①資料４の２ページ目（１）のアンケートについて、児童・生徒アンケートの回答数と回答率が低い。アンケート方法を知りたい。 ②板橋区内には５１校の小学校があり、全ての小学校で緑のカーテンを実施しているという報告を教育委員会から受けている。しかし、緑のカーテンの実施状況には温度差がある。緑のカーテンを導入することで、どの程度温度が低下したかといったような具体的な効果を児童自身に体感させる機会を設けられると、より効果的な環境教育につながると考える。 〇事務局 ①アンケート方法についてはタブレット端末を通して実施した。アンケートを作成する際に、質問数、実施期間、実施時期等を検討したが、結果としてはさらに内容の検討を深める余地があったと捉えている。今後同様のアンケートを実施する際には、より多くの回答者を確保できるよう手法の改善を追求していきたい。 〇小澤委員 ②緑のカーテンを設置することで涼しくなる原理を説明する際に、蒸散作用の意味を理解してもらう必要がある。蒸散作用を正しく理解したうえで、地球規模での環境変動について考察すれば、国際的な環境問題へとつながる重要な視点が得られる。 （３）「環境教育実践研究部会」の活動報告について 事務局より、資料５について説明が行われた。 岡部委員より、資料６、７について説明が行われた。 〇寒川委員 ①私の息子が夏季休暇中にエコポリスセンターを利用したことを契機に、二酸化炭素を酸素へ変換する自由研究を始めた。研究内容は中学生が学習する光合成の原理に準拠したものであり、エコポリスセンターが夏季休暇中の自由研究を支援してくれる点は極めて有益である。 ②J-クレジット制度の導入について検討いただきたい。具体的には、各小学校のプールが使用されない１０か月間の期間を活用し、J-クレジットを活用できる仕組みが構築できれば、財政負担の軽減が期待できる。

	③J-クレジットに関する資料は子どもにとって専門用語が多く理解しづらく、担任教師でも内容把握に困難を抱えているので、子どもが容易に理解できるような資料があるといい。 〇小澤座長 ①エコポリスセンターの館長も喜ぶと思う。エコポリスセンターは３０周年を迎えており、区民は環境教育に高い関心がある。 ②③中学生になると、授業の中で国際的な課題を挙げる機会が増える。例えば「ブラジルの熱帯雨林」の問題をテーマに、グループごとに分かれて議論する学習を見学したことがある。 生徒が探究活動を通じて得た気づきを基に、エコポリスセンターからヒントを得て、学習内容を進化させる。ある程度高度な課題に到達した段階で、同様の探究姿勢を保ったまま、中学・高校において国際的課題（例：熱帯雨林の保全、気候変動等）へ視野を拡げ、発達に応じて学んでいくことが必要である。 〇小澤座長 資料７では、「低学年から高学年になるにつれて発言機会が減少する」と記載されている。先述の「もやもやカフェ」のように、児童・生徒が自らの考えを対話を通して共有し、環境に関する価値観を共同で形成していくことが大事であると考える。 一方、最近タブレットを活用した授業が各校で導入されている。タブレット授業に対する現場教員の実感や課題認識、特にコミュニケーション能力との関連について意見を求めたい。 〇小澤委員 環境教育実践研究部会では、学年が上がるにつれて「人前で話す」児童の数が減少する傾向が見られたとのことだが、発言しない子どもが意見を持っていないわけではなく、思春期特有の恥ずかしさや自己評価の変化により口に出す機会が減っていると認識している。 したがって、話す行為やタブレットを活用して自分の考えを書き留め、共有できる場を設けることが重要である。デジタル機器を用いることで、口頭での発言が苦手な児童でも自己表現の機会が確保でき、意見の可視化が促進される。 環境教育は、現在の小学校教育の中で独立した教科としては位置付けられていない。図工や総合的な学習のねらいに組み込む形で実施されることが主流であり、学校ごとに重点や実施方法が多少異なるのはやむを得ないところである。むしろ、各校の実情に合わせた形で取り組むことが、児童にとって身近で実践的な学びとなる。 最近、朝会で評価した事例として、指示を受けることなく、６年生の児童が自主的に箒で落ち葉を拾い始め、その落ち葉を１年生が休み時間に踏んで遊んでいたことが挙げられる。このような積み重ねが小学校の段階では大事であると感じている。 〇岩本委員 学習心理学的な研究成果によれば「心が動く」ということは、驚きや発見がその大前提にあり、それが発達と成長と変容に連動する。 その変容の過程を自覚できる１つのツールとしてデジタル化がある。それを使いこなせばよいが、残念ながらそのデジタルそのものを使うこと自体が目的になっている授業

	が一定数存在する。 　小澤委員がおっしゃられたように、秋の日差しに落ち葉が閃くことで四季の変化を感じるような体験をベースにした事業はきっと心に残る。それが積み重なって、特に探究の過程で生じた疑問や関心を持った子たちは、エコポリセンターに寄り、復習しながら自分たちで探究活動を行い、また学校に戻って学習するような総合横断性が板橋のメリットであり、地域性であると思った。 （４）その他について 　事務局より資料８について説明が行われた。 〇幸田委員 　緑のカーテンは全国的にも知られる素晴らしい活動として定着している。この宝をより効果的に広げていってほしい。 私が個人的に関心を持っているのは板橋エコみらい塾の活動である。より多くの人が参加していただけるとよい。 　エコポリスセンターは様々な「拠点」としての役割を果たしている。板橋エコみらい塾は主に環境ボランティアなどを目指す方に向けた講座である。一般市民、学生、学校の先生などにも魅力的な内容を含む。例えば、学校の先生のなかには、ナチュラリストとともに教室の外に出ての自然観察などのフィールドワークや、講義を聞くことに関心を持っている方もいるでしょう。板橋エコみらい塾は、いろいろなかたちで活かしていけたら素晴らしいと思う。 　本日はNPO法人や地域団体が行っている多様な活動の中で、高齢化問題が挙げられた。志を持っている仲間がいても、身体の不調などにより以前ほど活動ができないということが現実として起きている。一方で、学生は授業や課外活動で多忙を極め、地域活動と接点を持つ機会が限られているという面もある。 　環境保全など、地域における様々な活動に携われている方々の高齢化の問題については、こうした方々の貴重な知恵が若い人に引き継いでいかれるように、エコポリスセンターに世代を超えた協働のチャレンジの拠点になっていただけたら素晴らしいと思う。 〇藤森委員 　環境基本計画２０３５について、全世代について考えた時に、保幼小中のような若い世代については問題ない。 　一方、例えば５０代～７０代の世代が１０年毎に計画を立てた場合、同じような活動を繰り返すことからマンネリ化が進む。マンネリ化すると、新鮮さが失われ、環境教育の効果が低下する恐れがある。 　したがって、２０３５年以降のプランでは、高齢世代向けに、時代に合うような環境教育のテーマや新規性のある取組みを設けるとよい。

	5　閉会 　座長より、閉会の宣言が行われた。